

棚尾まちづくり事業

平成24年2月21日（火曜日）

第8回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

棚尾の瓦屋、加藤平五郎、江戸時代棚尾村の村勢、棚尾の郵便など

2 テーマ15 「棚尾地方の食にまつわること」

(1) 説明（長田 銑司）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 テーマ16 「句碑：蔦堂庵、天涯、花蓑」

(1) 説明（小笠原幸雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4 連絡事項・情報交換など

藤井達吉現代美術館で「碧南の歴史と文化：近代棚尾の歴史」を開催中

2月4日～4月22日

5 次回日程

第9回 3月28日（水曜日）午後7時から

「永井賓水と句誌アヲミ」「大正天皇大嘗祭の歌碑」

第2回史跡巡り 4月3日（火曜日）午前9時から 八柱神社集合

第10回 4月24日（火曜日）午後7時から

「棚尾町役場高札舎」「秋葉山常夜灯」「棚尾村道路元標」「おりどの坂」

「棚尾地方の食にまつわること」

「三河四季の味」より

発行 昭和 58 年 8 月 10 日
著者 長田銑司 小判天店主
装画 山内一生
装幀 吉村二郎
発行所 株れんが書房新社
経緯 中部新報に掲載したものに加筆

「句碑：蔦堂庵、天涯、花蓑」

1 古久根蔦堂庵

(碧南市文化財第8集「碧南いしぶみ集」碧南市教育委員会平成5年1月発行から抜粋)

建立年月 昭和16年5月

建立者 門人一同

所在地 志貴町2丁目 妙福寺

表面 蔦堂庵 大いなる 蘆の入日や 月を待つ

裏面 昭和16年5月建立

解説 本名 古久根喜一 碧南市弥生町3丁目50番地に居住、同地において料亭「西村屋」を経営した。その後時世が悪く、昭和十五年に廃業する。家業の傍ら俳句に入り、高浜虚子に師事し、「ホトトギス」同人となる。俳友には賓水、冷石があり共に交流・研鑽した。また、蔦堂庵の門人も多く居た。昭和33年1月に没し、享年71歳。

(碧南文化 昭和44年1月号) 掲載記事

碧南市句碑めぐり (三) 蔦堂庵句碑 磯貝葛葉子

蔦堂庵氏は本名を古久根喜一とって棚尾に住居、正業は屋号西村屋と呼んで料理屋であった。晩年これを廃止し化粧品店に転業せられたが、それは妻の受持つ仕事であって、それには余り係はず、虚子先生の「花鳥諷詠」の横額をかかげ専ら俳諧の日を送って居られ、其の当時は直弟子の私と故長田丸石君（後に有旦と改名）と共に師事添削を得によく門をたたいたものである。

作句を初められたのは蔦堂と名乗り明治43年頃からと聞いて居る。近住の先輩永井賓水氏に学び其の後併せて花蓑氏を師として居られたが、氏なきあと松本たかし氏に師事し、もとより虚子先生を俳聖と仰ぎ、両先生の自宅を弟子を連れて訪問し直接の指導を請われた事も度々であった。其の当時の作句にも「在りし日の 親とも師とも 花蓑忌」

中途蔦堂庵と改名せられたが、自家の抱え妓全員に俳句を作らせると同時にその同輩妓にも奨め俳句をつくらせるなど、熱心さに感心させられたものであった。其の当

時の女弟子の内でも現在立派な俳人として碧南市に住んで居られる、榊原右太代及び玉置ふみ女氏等がそれで、後進の指導にも努力を続けてこられた。生活句の代表句と思はれるのは「羽織着て 花鳥賊料理 むたりけり」「泣きし目と 思はるゝ妓の 初鏡」氏の性格は一本気なところがあって、我々妓弟子にとって恐ろしく思われるほど厳しいことも度々であった。晩年は特に信仰心が強くなり「端居して 霊界あるを うたがはず」「怒らざる こと念願に 冬籠り」といふ様な心境ともなり、近親の進める医化学は余り信用せず昭和33年1月10日中風が急変し臥床数日にして72歳を以って他界せられた。

句碑は昭和16年5月直弟子長田丸石、榊原右太代、玉置ふみ女、小笠原つねを、磯貝葛葉子、杉浦葭舟と岩田としを氏その他十数名発起人となり、花叢氏句碑の有る碧南市棚尾の妙福寺に石工であった丸石氏の作によって建てられ「大いなる 芦の入日や 月を待つ」と言う句が刻まれて居る。

場所は花叢氏の句碑の位置から丁度反対側の山門を入り直ぐ左に曲がって突当たりの角、小さな弘法堂と御茶所の間に在り、ここには一本の寒椿が在って、年毎によく花を咲かせている。「寒椿 咲いて 蔦堂 句碑も古り」葛葉子
又昭和34年4月15日直弟子の企画で虚子先生の長文の序文を以て古久根蔦堂庵句集一本が刊行されてゐる。

※参考 本会第1回テーマ2「盆踊り」で取り上げた「棚尾小唄」は蔦堂、賓水の作詞である。

2 鈴木天涯

(碧南市文化財第8集「碧南いしぶみ集」碧南市教育委員会平成5年1月発行から抜粋)

建立年月 昭和46年7月

建立者 鈴木静(妹)

所在地 棚尾本町1丁目(光輪寺)

表面 仰臥して 壺中の天地 蟬時雨 天涯

解説 本名 鈴木市郎、俳号天涯、明治36年3月26日碧南市若宮町に生まれる。
昭和46年1月22日碧南市汐田町にて没す。

大正15年より永井賓水の「アヲミ」に入り、後に三輪一壺に師事し、熱中する。まこも会員。

※参考 昭和22年八柱神社奉賛会申込書の職業欄には「印判篆刻師」と記載されている。

3 鈴木花蓑

(碧南市文化財第8集「碧南いしぶみ集」碧南市教育委員会平成5年1月発行から抜粋)

建立年月 昭和30年9月

建立者 碧南市観光協会

所在地 志貴町2丁目 妙福寺

表面 白魚の 漁り火となん 雪の中

裏面 昭和30年9月 碧南市観光協会

解説 本名 鈴木喜一郎 俳号花蓑(はなみの) 知多郡半田町(半田市前明町14)で明治14年12月1日に生まれる。

半田・名古屋裁判所を経て大審院書記となった。碧南市源氏町にて昭和17年11月6日に没。高浜虚子の直門、ホトトギス同人、同派の重鎮をなした。また、俳誌「アヲミ」の援助者で同誌の雑詠選者として棚尾俳壇・三河俳壇の興隆に尽くした。「鈴木天涯句集」がある。

(碧南文化 昭和43年9月号) 掲載記事

碧南句碑めぐり 花蓑句碑 斎藤虹夢

鈴木花蓑氏の句碑は、碧南駅より県道を東へ徒歩にて約八分、名刹毘沙門天を安置する妙福寺境内にある。本堂と毘沙門堂の間にて、本堂寄りの隅に高さ約1.5米、根府川石のちょっとくねった木の幹の様な恰好で約40センチ位の台石の上に南面している。昭和30年9月碧南市観光協会の手によって建てられたもので、側に楓の木等二三本あり、うっかりすると見落とす場所にある。碑にある 白魚の漁り火となん雪の中 の句は、時の観光協会長杉浦敏一氏の発想により氏の掛け軸の実物大転写である。

花蓑氏は碧南市の対岸半田市の出身で、最初半田市に住み、裁判所に勤めながら高浜虚子のホトトギス俳句の投句をしていたが、俳句上達は虚子の住む東京に限ると上京し、大審院に勤める傍ら虚子の膝下で作句修行をし、ホトトギス同人になったのである。円本時代の日本文学全集俳句編にも作品がのっている。

大審院を定年退職後(昭和16年頃)碧南市に住むようになったもので(その頃の棚尾町字源氏42番地、現大島奥市氏宅一藤井達吉翁生誕の地)碧南市は故郷半田に近く、俳句の上での親しい友があったからで、又夫人の知人が居住していた事にもよる。

元来碧南の地は今更言うまでもないが、大正中期頃まで市の東を流れる矢作川には白帆が上下し、その川口又は北の方油ヶ渚等では白魚が豊に捕れたもので、時折、句友の

招きで来碧（その頃の棚尾町）したり、通行の途中立寄ったりすることのあった氏は碧南の句を多く残した。句碑の句はその代表的なものであった。

昭和 22 年 4 月東京の笛発行所から花蓑句集が刊行された。当時の事とてあまりよい紙質ではないが 120 頁ばかりの季題別に編集された手頃のものである。碧南市制 20 周年記念句集にも氏の句が故人として載っているが、皆氏を知るものの記憶にある句である。氏は短軀角張った顔で晩年は常に顔が左右に軽くゆれていた。昭和 17 年 11 月長田光浴国手（故人）に見守られながら 64 歳で碧南の地に永眠された。本誌 61 号 2 頁に高木二九氏が釈法蓑（花蓑氏の法名）と題して連作碧南探訪の中に詳しくかいておられる。（高木氏は俳鈴院釈法蓑の葬式の大導師である。）

「あじさいの 浅黄のままの 月夜哉」「鳥屋女房 芸者上りか 何かだらう」「明治節 属吏となりて二十年」「梅に浮く 雲に心の なしとせず」等列挙すれば限りもないが、句碑にある句の如きは氏の俳境を知る上に最も適切な句であろう。

（碧南文化 昭和 37 年 9 月 96 号）掲載記事

釈法蓑 高木二九

謄写刷りのアヲミ誌が出て、賓水さんの必死の努力は活字版となり、無理の上に無理して続けられた。雑誌選者もたけしさんから花蓑さんに継がれ、花蓑さんはマア同郷（半田出身）のよしみで鞭撻されました。自ら「花は紅、柳は緑」の写生に専念され。

「夕かげの ずんずん見えて 蟬涼し」

「あじさいの 浅黄のまゝの 月夜哉」

「大霜や不二は黄色に 日の当り」

東京に居て、アヲミを見ては、そのあまりにも駄句揃の雑詠に、涙をうかべ、賓水の広さは敬服すれどその深さのないこと。蔦堂のせま苦しいこと。（二九は常日頃蔦堂さんに読書を進めたものである）二九は名吟一句（実は励ましの言葉で、どうかこうか一句）駄句百句と批評されました。

当時、ホトトギス雑誌に選ばれることは鬼の首でも取ったような気で居るのに、これでは誠になさけないと嘆きかなしみ、出張あればわざわざ立寄って指導されました。

◎ 入れごと 棚尾出身の藤井達吉氏は、アヲミ誌を手にして句の良否は兎に角、棚尾言葉丸出しがなつかしいと)

昭和 15 年頃より、花蓑さんはどことなく重苦しい思いをされた。お酒のたたりだと人はいいます。戦さも進んできたので、疎開の意もあり、大審院書記の職も辞せられ、

郷里に帰らるゝとなった。そこで、アヲミ同人相談の上、棚尾に迎える事となり賓水其の他が東京に出て、妻女菊さん姪のみち子さん共々刈谷の陸橋も、釣上る思いをして、棚尾の一面に落ち着かれました。（ここは源氏 42 番地で、藤井達吉さんの生誕地で、現在は棚尾保育園長大島氏が住んで居られる。）

◎ 入れごと この家の裏に松林があり、小祠が祭られていた。それが、今は無く、ご神体は中山の神明として祭られ、その辺の字名を源氏神明といいます。

花蓑さんはこの家に居て、一步も外出せず、アヲミ同人其の他入り代わり立ち代り立寄り、作句に句評に明け暮れました。私はお逮夜務め、祥月勤めを致しました。

昭和 17 年夏も過ぎて花蓑さんはいよいよ病い重く棚尾の町も見ずに時雨暗き 11 月 6 日逝去されました。

ご縁によって、私が大導師として葬式をすることになりました。法名はすぐ^{ほうさ}積法蓑と思ひ浮かべましたが、さて院号は、まさか、時計院、振子院（花蓑さんのあだ名は、人呼んで時計といいました）でもあるまい、鈴を振って俳句を、アヲミの人々をはげまされました。姓も鈴木である。そこで院号は俳鈴院と進めました。

◎ いれごと 後日高浜虚子先生は、花蓑君は良い法号を得られたと側近に申されましたとやら

俳鈴院積法蓑の納棺もすみ、その頭北面西に光輪寺の住職（二九）は

流転三界中

思愛不能断

棄恩人無為

真実報恩謝

と、剃刀を取りました。

（愛知の文学碑 碑に見る文学史 吉田弘 「鈴木花蓑白魚句碑」から抜粋）

鈴木花蓑（1881～1942）は、半田に生まれ、本名を喜一郎といった。名古屋地方裁判所の勤めながら、名古屋の伊藤左右亭・伊東祐翠・宮野青芭らと俳句のグループを作っていたが、大正 4 年、家族を伴って上京、虚子の門をたたいた。虚子の膝元で俳句を学びたい一心での転居である。そして、大審院に就職、「研鑽を重ねて、ホトトギス雑詠欄における立派な作家の一人となり、巻頭をも占めるようになって、一時は花蓑時代ともいふべきものを出現する様になった。」（鈴木花蓑句集の虚子序文）

花蓑俳句の特徴は、凝視に徹した写生にあるといわれ、「美しい題材を発見すると、二

時間、三時間、あるいはそれ以上の時間凝視していて、句の成るまではそこを立ち去らなかつた」と、秋桜子を驚嘆させたほどであった。彼自身、「写生に一人出かけて行って、ジッと句を案じていると、泣きたいような、家に戻りたいような、哀しい感じに襲われる」といつていたことがあるというが、これは、句作の苦しみを吐露した本心であろう。彼のように凝視に徹すれば徹するほどこの苦しみは大きくなったに違いない。しかし、この客観写生の態度こそ、虚子の提唱したホトトギスの精神であり、その先駆的实践者として、昭和初頭、秋桜子・誓子・青畝・素十ら、四Sにも少なからぬ影響を与え、近代俳句史上忘れられない作家の一人となっている。

三省堂の虚子編「新歳時記」に例句として採り上げられている花蓑の句は、実に50句にも及びはるかに他を圧しているところからも、彼がホトトギスの中でいかに重要な作家であったかうなづけるのである。

次は、「鈴木花蓑句集」中の虚子推賞句である。

春雨の	上り際なる	水輪かな	昭和8年
くらがりに	かくるゝ如く	門涼み	昭和13年
菊の虻	蕊を抱えて	廻りけり	昭和14年
雪落つる	光飛び来ぬ	日向ぼこ	大正13年

晩年の花蓑は、病弱のため碧南に退隠。永井賓水主宰の「アヲミ」の選を引き受けた縁で、昭和30年9月、碧南市観光協会の手で棚尾妙福寺に「白魚の漁り火となん 雪の中 花蓑」の句碑が建てられた。